

「死んだ方がましだと思う。でも、誰からも忘れ去られちゃったら、もう、死ぬこともできない。当然の成り行きなのかもしれない。でも、笑っちゃうような話だとも思う」

雪が降っていた。

今年になって降るのは、初めてかもしれない。どうだっただろう。あまり覚えていない。

「——ああ、今、私はこの人を殺せるんだなって思ったの」
積もるような雪じゃない。地面に落ちるとすぐ消えて染みになっ

てしまう雪。こういう雪のことを、何といっただろう。日本には雪の呼び方が他に類を見ないほどにあつて——だから、そう、そんな記述を、たしか、国語の資料集で。

「裸の私の隣で、裸の先生が寝てた。先生は、私の隣で、静かな寝息を立ててた。綺麗な寝顔だった。私は眠っていなかった。だから、今、私はこの人を殺そうと思えば殺せるんだなって、思った」

お腹がすいた。

いや、満腹感はある。

お腹が膨れている感じはするのに、口がさみしい。何かを入れなければいけない気がする。

そうだ、口に入れるなら甘いものがいい。昔、昔はよくママと休みの日にお菓子を作った。いつからしなくなったんだろう、どうしてしなくなってしまったんだろう。いつの間にか、いつの間にか、だきっとそれに理由はない。

「何回殴ったかは覚えてないけど、いつの間にか、先生は死んじやっていた。動かなくなっちゃってた。白いシャツが真っ赤になってた。血のおいがすごかった。あんなにたくさんの血を見たのは、初めて。生理のときのおいと、全然違うんだね。知ってた？」

コンピニの袋に手を突っ込んだけれど、何も出てこない。おかし

い、だって、ここに来る前に色々を買ってきたはずなのに。お腹がすいた、口がさみしい、何か甘いものを食べたい。甘いものは別腹だっというし、それって科学的に証明されてるんでしょう？ だから、ほら、大丈夫。

「私は先生を殺して、逃げた。そうしたら、私は、この世界にいないことになっていた。私は確かにいたはずなのに、生きていたはずなのに、今だって生きているのに、誰もそのことを知らない、誰もそのことを覚えていない。いつの間にか、私は存在しないことになっていた」

ママのお葬式ではいろんな人が泣いていた。ママのお友達の智子さんや昇美さん、親戚のふさ子おばさん、陽子さん。パパも、おばあちゃんも、みんな泣いていた。

「誰も私を知らないって言うの。皆、私に向かって『誰だ』って言う。どうして？ 私は、私はここにいるのに。私はここにいる。ここにいてちゃんと生きてる。そう叫んでも、その声は、誰にも届かない。私はいないことにされている、だからその声が届くはずもない」

わたしは、泣いていただろうか。ママのお葬式で、わたしは泣いただろうか。記憶にない。どうして覚えていないんだろう。今も家のあちこちにママのおいが残っている。リビング、キッチン、寝室、ベランダ、お庭、玄関、納戸、本棚、トイレに洗面所に、ホンダの青い車の運転席に、あちこちに、そこらじゅうにまだママがいる。

「死んだ方がましだと思った。でも、私ね、気づいちゃったの。今の私は、私という人間がいなくなったことさえ、認識してもらえない。それは死ぬなのと同じこと。私の死は私だけのものではないから、その死を経験するのは私以外の誰か」

だからわたしは家にいたくない。家にはそこらじゅうにママがいるのに、ママはいない。だからわたしは家にいない。家にいないのに、